

# REITAKU JOURNAL

ゆっくり読みたいスクールカルチャーマガジン

感染症 児童虐待  
 貧困 食品ロス 土壌汚染 自殺 ジェンダー格差 (男女平等)  
 海洋プラスチックごみ 教育 識字率問題  
 大気汚染 資源枯渇 SDGs 森林破壊  
 代理出産 水不足 教育 児童買春 児童労働  
 CO<sub>2</sub>の排出 少年兵  
 飢餓・栄養不足 災害 所得格差  
 地球温暖化 人種差別 フェーキングブア  
 大気汚染 気候変動 ゴミ問題 放射能問題  
 LGBT 密猟 移民  
 ヒートアイランド現象 紛争  
 ハラスメント 大量生産・大量消費 人身売買・人身取引  
 少子高齢化 タックスヘイブン  
 異常気象

## 探究

### なぜいま、探究学習に取り組むのか

「なぜ？」が成長の鍵	01
実例も紹介！ 探究学習はこうやって進めよう	03
大学で探究心をカタチに、可能性は無限大	05
[インタビュー] 「国際協力が何だろう」「ボランティアって何だろう」	
そう問い続けながら、私たちが得たものは / Japanesia	07
[インタビュー] 目指す先は世界で活躍する日本人	
世界中の大学生が各国を代表して参加する模擬国連団体の活動 / 麗澤模擬国連団体	09
社会人からのメッセージ	11
[インタビュー] 挑戦への恐怖心を乗り越えたところに成長のチャンスがある。	
教えてくれたのは「麗澤大学模擬国連団体」です / 青柳 昌樹	13

小規模にこだわる。  
国際性にこだわる。

もっと、麗澤について知りたい人は…



Reitaku Journal  
<https://www.reitaku-u.ac.jp/journal/>

## 探究学習とは何だろう？

「探究学習」の取り組みが高校でも本格的にスタートしましたが、そもそもなぜ探究学習を行うのでしょうか。

## 日常は「当たり前」が溢れている？

小さい頃は、わからないことだらけだった毎日も、年齢を重ねるにつれ、「疑問」が「当たり前」に。改めて「なぜ？」と考えたことはありますか？

なぜ？

- 空は青い。
- 信号の青は進め、赤は止まれ。
- サイコロの1の目は赤。
- 趣味に没頭するとあっという間に時間が過ぎる。
- 朝起きたら学校に行く。
- 最初はグー。  
etc...

## 深刻な「なぜ？」不足

「探究心」が「ココロ」を動かしている。

私たちが楽しいと感じたり、感動したりするのはどんな時でしょうか。試験でよい点数が取れた時、頑張ったことが認められた時、試合で勝った時など様々でしょう。きっと共通しているのは、結果を出すために、「どうしたらよいか？」と考え、試行錯誤し、実践したことではないでしょうか。

POINT!

「ココロ」が動くと行動につながる。

探究学習は、正解のない問いに、「なぜ？」「どうしたら？」で「ココロ」を動かし、学びの楽しさを気付かせてくれます。

# 成長の鍵

# なぜ？が

key to growth

"Why?" is the

## 「なぜ」いま探究学習なのか？

社会は「正解のない問い」に答えを見いだせる人を求めている

### 理由① 予測困難な時代の到来

グローバル化は私たちの社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的に変化させつつあります。

### 理由② AIやロボットの台頭

すべての人とモノがつながり、あらゆる知識・情報が共有される時代が来ています。人間が行っていた作業をAIやロボットに任せることができるようになるでしょう。

POINT!

当たり前だった認識や価値観は今後、劇的に変化。

## 探究学習は未来につながる学び

探究学習で身につく力は、進路選択や就職など、近い将来訪れるであろう分岐点において、そして社会に出てからも大きな力となるでしょう。すべては、皆さんの未来につながっています。

ドキドキ

もっと知りたい

楽しい

ワクワク

# 実例も紹介！ 探究学習はこうやって進めよう

いざ「探究」しようと思った時、どのように取り組めばよいのか、手探りな人も多いはず。ここでは簡単に進め方と高校の探究学習事例を紹介します。

## 探究学習の進め方

### [探究学習の4つのステップ]

#### STEP1 課題の設定

高校での探究学習ではあらかじめテーマが設定されているケースが多いですが、大切なことはテーマに対するあなた自身の「問い」です。日常生活で疑問に思うことや、興味関心があるもの、ニュースで取り上げられている社会問題、環境問題などについて複数の視点から考えてみましょう。「当たり前」を疑うことも重要です。あなた自身には実感がなくても、ほかの誰かにとっては「課題」ということもあります。一人で考えるのではなく、チームでブレインストーミングをすることも有効です。

#### STEP2 情報の収集

調べ始める前に、あらかじめどんな情報が必要になりそうかを書き出しておくことが重要です。なんとなくで情報収集をスタートしてしまうと、時間ばかりが過ぎてしまう、集めた情報に偏りが出してしまう、などのデメリットがあります。また、ひとつの収集方法で完結しないことも重要です。インターネットだけでなく、図書館の文献、インタビュー取材など複数の手段によって情報を得ることで、より正しい情報に近づけることができます。

#### STEP3 整理・分析

自分の思い込みで分析せず、集めた情報を比較、整理しながら客観的に、あらゆる可能性について考えてみましょう。「自分の立場ならこう考える」「大人の立場なら」「祖父の立場なら」と、目線が異なると物事の捉え方は大きく変わるものです。ただし、話が膨らみすぎて、本来の課題から大きく外れてしまうこともあります。常に設定した課題を意識しながら、分析を進めましょう。考え方や分析については様々な手法がありますので、ぜひ先生に相談しながら進めてください。

#### STEP4 まとめ・表現

皆さんが考え、分析した結果に間違いはありません。つまり、「正解はひとつではない」ということです。調べたことに自信をもって発表してください。これは他人の発表を聴くときも同じです。発表者の意見に同意することも大事ですし、違う意見を持つことも大事です。重要なことは「私ならこう考える」、そして、「それはなぜなのか」を自分の言葉で説明できるようにしておくことです。これらを積み重ねることで自然と探究が得意になっていきます。

## ブレインストーミング

ブレインストーミング（通称：ブレスト）は、複数の人が集まり、ひとつのテーマに対してアイデアを出し合うことです。一人で考えると先入観や主観に左右されますが、何人かで行うことで新しいアイデア、解決案にたどり着くことができます。また、皆で幅広く考えることで思考の抜け漏れが出にくい、というのも特長です。



### [ブレストのルール]

#### 1 他人のアイデアを否定、批判しない

ブレストの目的は皆で多くの意見を出し合うことです。意見を否定されると発言しづらくなるので、他人の意見を否定してはいけません。どんな意見であったとしても、それもひとつのアイデアなので否定しないことが大切です。

#### 2 アイデアは「組み合わせ」が前提

一人の意見、ひとつのアイデアを優先するのではなく、いろいろな意見やアイデアを組み合わせることで画期的なアイデアが生まれる場合があります。積極的に他のアイデアと組み合わせよう、という心構えが必要です。

#### 3 質より量を大事にする

ブレストはアイデアの量が多くなることで、初めてそこから質を高めていく議論ができます。答えを出すことを急がず、もっとほかの考え方はないか、こういう風には考えられないか、と思考に幅をもたせることが重要です。

#### 4 ブレスト中に結論は出さないようにする

ブレストの目的は多くのアイデアを出し合うこと、思考の抜け漏れを防ぐことで、決してその場で結論を出すことではありません。各自がブレストの内容を持ち帰り、あとからまた新しいアイデアを思い浮かべ、次回共有するというサイクルが望ましいです。

## 松島先生のワンポイントアドバイス！



麗澤大学 国際学部 教授  
松島 正明

### 課題の見つけ方

「課題を探し、見つける」ためには、①視点を変える、②疑問を抱く、③好奇心を高める、の3点が重要です。皆さんが常々見ている「日常」は、皆さんにとって「当たり前」のことが多く、改めて疑問を抱くことは少ないと思います。しかし、「高齢者や障害を持つ方が見た場合」や「外国人が見た場合」のように、異なる視点（目線）から関心を抱くことによって、これまで気づかなかった「疑問」が見えてくるのです。

### 情報収集の仕方

情報収集に関しては、常に自身のアンテナを高めておくことが大事です。世の中には多種多様な膨大な情報が溢れています。その中から「何が問題になっているのか」を知るためにすべきことは、①新聞や雑誌をじっくり読む、②環境や教育など各分野に関する書籍を読む、③SNS等を活用して国内外で活躍するNGOや国際機関等の活動を知る、の3点に尽きると考えます。収集した情報の中で、皆さんのアンテナが最も強く反応した事例が皆さんの「関心」につながると考えます。

### 答えの出し方

課題を見つけ、情報を仕入れたら、次は「分析」です。集めた情報をそのままにしては、いつまでもたっても「情報」のままです。大事なことは、集めた情報を整理して「掘った問題は何か、なぜ起きるのか」について整理することです。正しく分析ができれば、対策を立てることは比較的容易です。自分なりに対策を立てた段階で、先生方に相談して助言・アドバイスをもらうことを心がけてください。

## 高校の探究学習事例

### 千葉県立千葉北高等学校

本校3年生は、高大連携の一環として麗澤大学国際学部の協力を得て、SDGsに関する探究学習を行いました。プロジェクト冒頭に実施した同学部・梅田教授によるオンライン講演会（演題：SDGsを通して世界に目を向ける）は、SDGsの基礎的な知識を交えた、統計データ等を用いた実践的な内容でした。この講座を皮切りに、各生徒は自身が目標とする進路分野に関連した社会問題をSDGsの視点から調査・分析を行い、クラス内でプレゼンテーションを実施しました。各クラスの代表者による最終プレゼンテーションでは、「ジェンダー差別をなくそう」「教育格差を縮めるためには」「投票率の低下と政治への影響」といったテーマが並び、学年全体への校内ライブ配信により実施しました。最終評価は、再び梅田教授も加わり、専門的な見地から各発表への講評をいただき、生徒たちにとって深い学びのあった探究学習となりました。本プロジェクトを通じて、1つのテーマについて様々な切り口でリサーチし、問題の本質を捉えようと試行錯誤する生徒たちの姿が印象的でした。

### 高校生に身につけてほしいこと

「自分自身に関わる問い」「教科の学習に関わる問い」「社会に関わる問い」の3つが重なる部分を意識した探究テーマを設定し、取り組んでほしいです。



### 千葉県立松戸国際高等学校

学習の礎となる「主体性を持って対話的に学習しようとする態度」の育成を目指し、1年生でSDGs総合探究学習を実施しました。SDGsの17のゴールから、現状の問題を自ら考え、情報を取捨選択し、仲間と協働し、調べたことをポスターにまとめ、全員参加によるポスターセッションを実施。個人としては活動の振り返りとして「SDGs新聞」を作成しました。調べ学習を充実させるため、図書室には県立図書館からも本を借り入れ、SDGsコーナーを設置してもらいました。また、放課後の時間に生徒たちが調査・ポスターづくりをできるように、図書室、PCルーム、グループ学習のための教室を開放し、教員を配置して生徒の学習をフォローできる体制を取ったなどの工夫をしました。

### 高校生に身につけてほしいこと

学ぶ姿勢。将来求められるのは「応用力」です。そのためにも、全力ですべての教科を学び「基礎力」を身につけてほしいです。



# 大学で探究心をカタチに。可能性は無敵大。

大学の学びは「探究」です。大学は自分の興味、関心を深めていく場です。なぜ大学に行くのか、志望校をどうするか、と考えることも探究に近いかもしれません。探究心を持って、「なぜ?」「どうしたらよいのか?」と考えることは、皆さんの想像以上に変化を生み出してくれます。きっと新たな出会いを得て、考え方が広がるはずです。ここでは、自分のやりたい事を見つけて、日々頑張っている学生を紹介します。

## 先輩の事例

### 将来なりたい自分を見据え、いま、できることを全力で

国際学部 国際学科 国際交流・国際協力 (IEC) 専攻 2年次生 荒井 航平さんの場合

[高校生の頃の荒井さん]

### 課題の設定：国際協力に関わりたい

父の単身赴任先のベトナムに行った際、日本と開発途上国の違いを実感。開発途上国の課題を解決したいと考えていました。

### 課題に対する行動

#### 1 大学選び

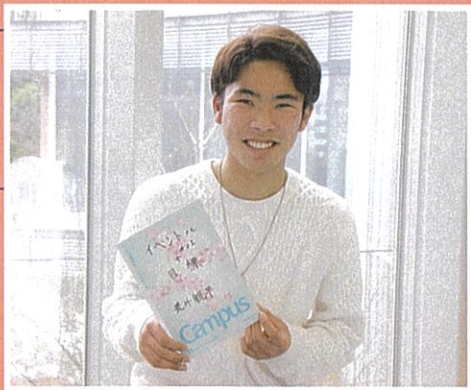
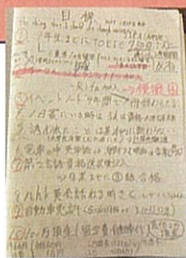
国際協力について専門的に学べる麗澤大学の環境を選択。きっかけはオープンキャンパスでの国際学部の松島先生との出会いでした。松島先生は独立行政法人国際協力機構 (JICA) 在籍時、開発途上国で所長を務めるなど国際協力に携わっていた先生です。色々話をしながら、国際協力への想いがさらに確かなものになりました。

#### 3 大学の授業

まさに探究学習です。いまは自主企画ゼミナールで Japanesia という団体に所属し、開発途上国ミクロネシア連邦の環境問題解決に向けた活動に力を入れています。フィリピンの東、607の島からなるミクロネシア連邦の廃棄物問題の改善、およびSDGsの13、14、15のゴールへの貢献を課題として活動しており、2021年度はコロナ禍で現地に渡航できないことも踏まえ、現地小学校の環境教育に使用できる絵本を制作しました。

### 【荒井さんの目標ノート紹介】

「国際協力に関わりたい。」そのために何ができるか、具体的な目標を設定し、いま、できることに挑戦しています。目標設定を行ったことで、やるべきことが明確になり、行動する中で新たな出会いや経験が広がっています。「目標設定の大切さを知ってほしい」という思いで合格者・入学予定者向けイベントも企画・開催しました。



#### 2 高校卒業

大学での具体的なアクションプラン (目標ノート) を作成。たとえば英語力はJICA海外協力の語学力審査A判定に必要なTOEIC®730点以上を1年次終了までに取得など、国際協力に関わるために必要なことをすべて書き出しました。

#### 4 新たなボランティア団体「Tweedia」の立ち上げ

授業をきっかけに“食”を通じた国際社会貢献団体「Tweedia」を立ち上げました。2021年度はNPO法人TABLE FOR TWO Internationalの「おにぎりアクション2021」の活動を学内に広め、アフリカ・アジアの子どもたちに麗澤大学から480食分の給食を届けるアクションを達成。2022年度は農家の不揃い野菜から食を提供し寄付につながるプランを計画中。

## 先輩の事例

### 後輩のために自分に何ができるか。想いをカタチに

外国語学部 外国語学科 英語コミュニケーション専攻 2年次生 村田 遼一郎さんの場合

[入学当初の村田さん]

### 課題の設定：新入生の不安を解決したい

初めての大学生活。授業の登録方法やパソコンの使い方など、細かな点ですが意外と苦労することが多く、コロナ禍も相まって、先輩や先生に聞くことができず不安を抱えていました。だからこそ、後輩のために、「何かできないか」と考えました。

### 課題に対する行動

#### 1 新入生サポート団体「Relate」の立ち上げ

不安な新入生が気軽に先輩と話せる機会をつくるため、「Relate」という団体を立ち上げました。5名のメンバーと協力してくれる仲間とともに、まずはInstagramを中心に活動。在学生の時間割を公開したり、質問を受け付けて回答したり、新入生の悩みを全体で共有する場をつくりました。

#### 3 「Relate」を広げる

いよいよ4月、新入生にこの団体をどこまで知ってもらおうか。入学式やガイダンスなど、様々な機会を模索し相談。オープンキャンパスでも高校生のサポートができるよう、企画を実施しています!



#### 2 合格者向けイベントをオンラインで開催

入学前も、これから始まる大学生活に不安を抱えている人が多いはず。そこで、合格者にも在学生の声を届けたいと思い、大学の職員の方に合格者向けの相談イベントを提案。1時間半のイベントに50名以上の合格者が参加し、充実した交流の機会となりました。

## PICK UP! 探究心を育み発展させる、麗澤大学の特長的な授業

### 1 1年次から始まるPBL (課題発見解決型学習) 『麗澤・地域連携実習』

PBLの場を大学が用意。柏市や地元企業から提示された課題に取り組みます。この経験をきっかけに、2年次以降、本格的なPBLへ学生が自主的に取り組みます。

### 2 学生の探究心をカタチにする『自主企画ゼミナール』

学生が自ら学びたいテーマを探し、担当教員を選び、学習計画を立て進めていく。小規模教育を重視する麗澤大学だからこそ実現できる独自のゼミナールです。



この他にも各学部で積極的にPBLに取り組んでいます。

実際のゼミナール例は次ページで

# 「国際協力って何だろう」 「ボランティアって何だろう」 そう問い続けながら、私たちが得たものとは

前編

ミクロネシア連邦で環境教育活動を行うJapanesia (ジャパネシア) は、国際協力を実践的に学びたい学生が集まってできた自主企画ゼミナールのひとつです。どんな取り組みをしているのか？メンバーの想いとは？リーダーの池田将太さん、山城結愛さん、担当教員の松島正明先生にインタビューしました。

池田 将太

外国語学科 英語コミュニケーション専攻  
2021年3月卒業

Japanesia (ジャパネシア: ジャパン × ミクロネシア) 自主企画ゼミナールの学生代表。高校時代は野球に専念、気合と根性に自信あり。苦手な英語も、気合と根性、先輩の猛特訓により克服する。

山城 結愛

外国語学科 英語コミュニケーション専攻  
2020年3月卒業

高校の校外学習で、先輩を訪れた外国人に英語で道案内をしたのを機に英語の楽しさに目覚める。趣味の映画鑑賞で英語力アップを目指す。

松島 正明

国際学部 教授

銀行員を経て、1992年、国際協力事務局 (現 独立行政法人国際協力機構 JICA) に入職。バングラデシュ、アフガニスタン、イラクなどで勤務。2018年4月よりJapanesia自主企画ゼミナールの担当教員に。

であるボンベイ刺繍の工房をリサーチし、サンダルに刺繍を施せるよう調査を重ねました。資金面ではクラウドファンディングを行い、ミクロネシアの現状や私たちの活動を知ってもらった上で資金面でご協力いただける方々を募りました。ただ製造・販売するだけでなく、できるだけ多くのミクロネシアの人たちと一緒に販売の実現に漕ぎつきたいと、試行錯誤しながら取り組んでいます。」

山城：「現地で活動できるのは、夏休み中の2週間のみ。そこに向けて、普段はミクロネシアについて徹底的にリサーチし、メンバーで議論しながらプロジェクトの詳細を詰めていきます。その過程では、壁にぶつかることも。私が一番苦慮したのは、先輩から活動を引き継いだときでした。新しいチームはほとんどが新規メンバーだったこともあり、どこかぎくしゃく。ミーティングをしても意見は出ない、「このままではプロジェクトは進行できないかもしれない」と内心焦りました。そんな中変化が起きたのは、とにかくみんなと会話をしよう！と決めてから。Japanesiaの活動にとらわれず、とにかくメンバーと一緒にいる時間を大切にしました。一緒に旅行にも行きました。活動についてだけでなくプライベートも共有することで、何でも話せる関係が築かれていったのです。夏になる頃にはチームワークもばっちりで、メンバー9名、それぞれが造材造所で力を発揮できるようになりました。最初は「私がチームを引っ張らなくちゃ」とどこか気負っていましたが、日本でも海外でも、大事なものはコミュニケーション。改めて気づかされました。」



「目標は何だ」先輩の一言で、  
人生が変わりました

池田：「Japanesiaの存在を知ったのは、1年次の秋。今はご退職された当時の担当教員だった先生が、その活動の様子をビデオで見せてくれたのです。皆がひとつの目標に向かって、意見を真剣に戦わせたり、海外で活動したりする姿に「自分が夢中になれるものはこれだ、ここでなら充実した大学生活を送ることができる！」とその場で参加を決めました。Japanesiaでは活動を通して、いろんなことが得られます。そのお陰で英語も猛勉強して随分上達しました。大使館関係のお手伝いやミクロネシアからの留学生との交流など、普通の大学生活ではなかなかできない貴重な経験も多く、大きな学びの機会をいただける。そして一番は、仲間との出会い。時には議論が白熱することもあります。家族のような存在のメンバー、ミクロネシアからの留学生、人生の手本となる先輩方。私たちを見守り、頼った時はいつもの確かなアドバイスをくださる松島先生。私の一生の宝物です。」

山城：「私がJapanesiaに参加したきっかけは、先輩のある一

言。大学で何を学びたいのか自問していた頃に、たまたま、当時 Japanesia に所属していた先輩と話す機会があったのです。青年海外協力隊での活動が決まっていたその先輩は、情熱があって、やりたいことが明確。その先輩から「目標は何だ」と聞かれ、はっとしたのです。このままじゃダメだ、私も先輩のようにになりたい！ そう思って、活動に参加するようになりました。それから、英語をもって頑張ろう、論理的な日本語力も身につけたい！ やりたいことが次々と湧いてきて、意欲をかきたてられました。いまは一日一日を大切に充実した学生生活を過ごしています。いま、私の目標は、「国際協力って何だろう？」という問いに、自分なりの答えを見つけること。ボランティアの意義って？ 人を助けるってどういうこと？ — 自分の言葉で表現できるようになれば、さらに前進できるはず。将来も、人々がもっと生きやすい社会にしていけるための活動に携わっていきたいです。」

“Cool Head, Warm Heart”  
国際協力に必要なものはその2つ

松島先生：「Japanesiaは、単なる学生自主活動ではなく、これまでの先輩諸氏の活動成果の結果、日本・ミクロネシア間の組織的・人的ネットワークの一員となっており、最近では在京ミクロネシア大使館のレセプションなどフォーマルな場からも声がかかり、各国のVIP接遇などに参加する機会も増えてきています。これも先輩たちが築いてきた功績の証であり、調査・研究活動に加えて社会人経験も積むことができる良い機会となっています。私は学生から意見を求められない限り、基本的には活動に口出しはしません。私が何か言えば、学生たちは私の言うことに影響されて、本当にやりたいことを伸び伸びとできなくなるからです。Japanesiaの活動の意義は、学生が自らアイデアを出し、やりたいことに失敗を恐れずチャレンジすること。活動の目的は、困難なチャレンジを通して、相手国の歴史、文化、社会および日本との関係をしっかりと理解し、途上国である相手の痛みや苦しみを、自分のこととして捉えられる人材となることにあります。それが国際協力の土台となるのです。では、国際協力とは何か？ 一言で表すことは難しいことですが、あえて言えば“思いやり”ではないかと考えています。ただし、国際協力はチャリティとは異なるため、“Cool Head, Warm Heart” (クールな頭脳と温かな心) で行動することが重要であると思います。相手の立場に立って考え、行動できる人材になることができれば、国際協力のみならず、ビジネス、医療、教育などいかなる分野・領域でも通用し、より良い社会の実現に貢献していけるでしょう。学生の力だけでは及ばない領域があったり、安全管理やコンプライアンスなどに関してやや不安だなど感じたりした際には私がサポートします。人間力を育む場のひとつとして、Japanesiaを大いに活用していただきたいと思います。」

ミクロネシアの人たちと  
タイヤサンダルを販売したい！

池田：「このミクロネシア自主企画ゼミナール (以下、Japanesia) は先輩の代にあたる2013年から、ミクロネシアの小学校でゴミ問題の啓発を目的として環境教育をテーマにワークショップ、英語劇等を行いながら活動を続けています。2018

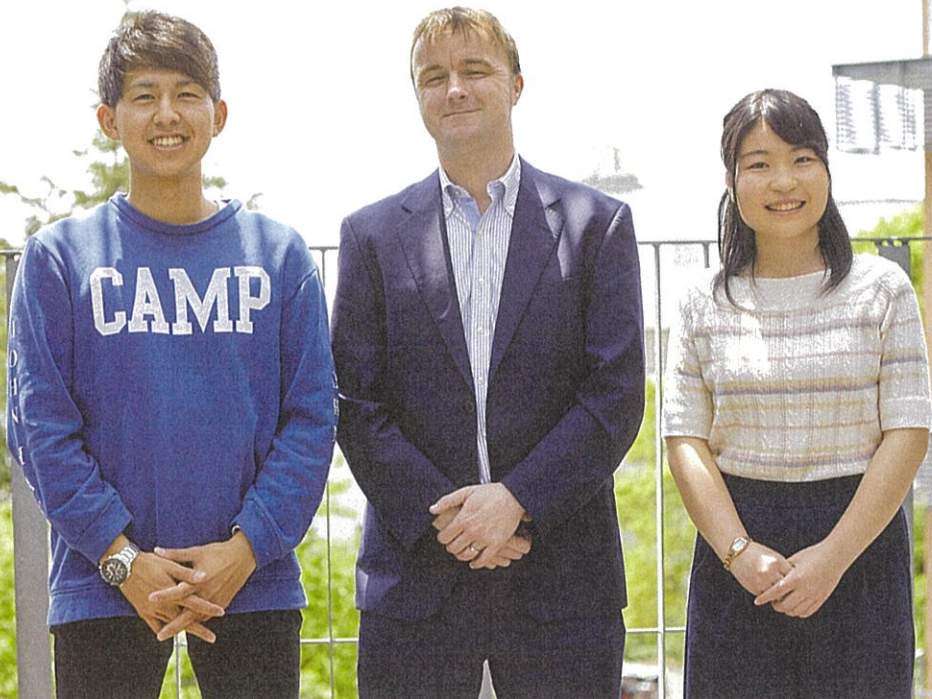
年は私たちの代で、新たに『タイヤサンダルプロジェクト』を発足しました。ミクロネシアには廃棄タイヤがたくさんあり、処理方法などに課題があります。その廃棄タイヤを材料にサンダルをつくり、販売することで、ゴミ問題の解決と雇用創出につながるのではという思いから始まったプロジェクトです。実現に向けて、日本で手づくりタイヤサンダルを販売する福祉施設を訪ねてつくり方を教わりました。また、サンダルに付加価値が必要だと考え、ミクロネシアの伝統工芸

記事はこちら



# 目指す先は世界で活躍する日本人 世界中の大学生が各国を代表して 参加する模擬国連団体の活動

前編



中村 憲孝

外国語学部 外国語学科  
英語・リベラルアーツ専攻  
2021年3月卒業

専門学校に通いながら警察官を目指したが受験に失敗。これを機に、英語教員への道を目指して麗澤大学に入学。2年次から模擬国連団体の活動に従事するほか、Japanesiaにも参加していた。

Walker Richard ウォーカー リチャード

外国語学部 外国語学科 准教授

2019年度から模擬国連団体の担当教員に就任。英国出身、アストン大学(英国)TESOL修士課程修了。アジアに関する研究を約25年間続けている。2013年から麗澤大学外国語学部の教員を務める。

平野 友美

外国語学部 外国語学科  
英語コミュニケーション専攻  
2020年3月卒業

3~10歳の時に中国・広州や香港に在住していた経験から英語や中国語など外国語への興味が高く、語学力を磨く環境を求めて麗澤大学へ入学する。大学2年次から模擬国連団体の活動に参加し、3年次にはサブリーダー、4年次にはリーダーとして9期の麗大チームを牽引。Japanesiaにも参加していた。

## 国連の模擬会議で通用する 英語力や人間力を鍛える

麗澤大学は、学部を問わず1年次から「PBL課題発見解決型学習」(以下、PBL)という、課題解決を目指したフィールドワークを推奨。学生たちは日頃の授業に加えて、意欲的に

学外活動にも励んでいます。

中でも活発な活動が続けるPBLのひとつが、麗澤模擬国連団体です。模擬国連団体とは、参加者が一国の大使・代表となって様々な国際問題について考える、大学単位で参加するサークル活動のこと。日頃の活動を披露する場が、毎年、全米の主要都市で開催される「全米模擬国連大会」です。麗澤大学は、2011年から毎年11月にアメリカ・ワシントンD.C.で開催さ

れる全米模擬国連大会に連続出場中です。アメリカを中心に世界中から70を超える大学が参加し、国連を模倣する学生会議の場で麗大生が奮闘。その成果は3年連続(2016~2018年)受賞の快挙。しかも2018年は、3つの賞を受賞する偉業を達成しました。

2019年度からは第9期として活動がスタート。もちろん使用言語は英語です。秋の大会に向けて、団体メンバーは毎週一度必ず集まり、様々な国際問題を英語で深掘りしながら情報をインプットし、かつ議論のためのアウトプット力を高める日々を過ごしています。

ハードに見られる活動ながら、年々参加希望者が増加中。9期の総勢は過去最多の35名を超えます。麗澤大学は語学に定評があり海外からの留学生も数多く通うだけに、日常の学生生活からでも国際色溢れる雰囲気や自然と味わえる環境です。日頃の授業やサークルなどは別に国際経験を養う活動に直に触れ、真剣勝負の場で自らを鍛えたい意欲的な学生たちを中心に、刺激に満ちたPBLとして展開中です。



磨くのは英語力だけではない。

だからこそ「やりがい」がある

リチャード先生:「毎年恒例の『全米模擬国連大会』は、アジア圏からの参加は極めて少ないため、戦う相手のほとんどが英語のネイティブ。ハードルの高さは覚悟の上です。だからこそ、今回インタビューした学生二人の話を参考にしてください。二人とも最初から英語が堪能だったわけではないのです。」

平野:「幼い頃に海外在住経験があったこともあり、語学、特に英語に対する興味・関心が高く、実践的に英語を学べる環境を求めていました。英語は得意科目のつもりでしたが、入学当初はまだまだでした。授業がない長期休暇中も、忙しいけれどやりがいに溢れるこの活動を通じて実践力を身につけました。」

中村:「すごく得意というわけではありませんでしたが、もともと英語に興味がありました。授業以外でも自分を磨ける環境に身を置きたくて、模擬国連団体の活動に惹かれました。英語をツールとして、政治や経済、歴史などを国際的な視野で考え学べる環境はとても刺激的ですし、自分へ投資してこれからの未来へつなげたいです。」

2019年度からは、新たにリチャード先生が顧問に就任。「意欲的な学生たちばかりで、頼もしい!」と太鼓判を押します。リチャード先生:「毎週の活動では、学生たちがそれぞれ調査してきた結果の共有や、テーマに基づくプレゼンテーションを行います。毎回の活動がとても濃厚です。私はファシリテーターとして、学生たち側からは出にくいアイデアを投げかけたり、議論が行き詰まった時などに、きっかけを与え

る役割に徹しています。毎週の活動以外にも、さらにグループ別に異なるテーマについて話し合ったり調査したりと、たくさん時間をかけて活動をしています。この前もリーダーの平野さんとの打ち合わせがありましたが、あつという間に数時間(笑)。これらを厭わない積み重ねの先に、必ず一人ひとりの成長があると確信しています。」

現地で実際に感じた大きな挫折。

挫折が「いま」の原動力!

毎年秋に開催される「全米模擬国連大会」に出席できるのは8名ですが、それ以外のメンバーもサポートメンバーとして大会の準備に動かし、文化祭などほかの舞台でも中心となって活動内容を披露します。実は平野さんは2年前、中村さんは1年前、それぞれ大学2年次に代表8名のひとりに選ばれ、ワシントンD.C.での大会に出席。二人は現地で大きな挫折を味わうのです。

平野:「ずっと英語を勉強してきた自負はあったので、「それなりにできるはず」と自信を持って臨みましたが、会議が始まる前から周りの雰囲気に圧倒されて。会議でのネイティブの対話スピードが速すぎて、ついていけない。何を話しているのか、全然わからない。3日間の会議の中で自分の実力のなさを実感して、ものすごくショックを受けました。毎日のようにネイティブの先生と会話していたのに、こんなにもできないものなかと痛感。もし次回チャンスがあるなら、絶対聴き取れるようにする! 堂々と議論を戦わせる! と、この時強く決意を固めました。苦い経験ですが、忘れられない貴重な経験でもあります。」

中村:「いまの僕を支えるのが、当時の悔しい気持ちなのです。現地で何もできなくて本当に悔しかった。でも悔しさをネガティブには捉えていません。こんなに悔しいと思えたのはいままでも必死に頑張ってきたから。大会に参加したい仲間がたくさんいたにもかかわらず役に立てなかった悔しさを「次こそ挽回したい」という前向きな気持ちに変えて、いまの自分自身の原動力にしています。」

二人が異口同音に伝えたのが、初参加だからこそ受けた現地での衝撃。「悔しくて涙を流した」と口を揃えた二人が、「来年に向けた大きなモチベーション」へとつなげた意識改革(気づき)こそ、この活動の真の醍醐味であるとも言えます。



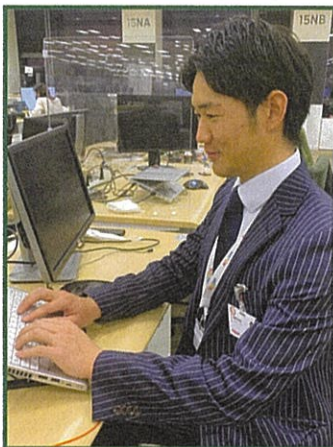
後編はこちら





# 社会人からのメッセージ

探究学習で身につく資質や能力は、社会に出てからも様々なシーンで必要とされます。急速に変わりゆく社会の中、第一線で活躍する社会人へ様々な視点からインタビューを行いました。就職はまだ先のことから…ではなく、いまから意識しておくことで、きっと皆さんの可能性が広がっていくはずですよ。



## 楽天グループ株式会社

アシスタントマネージャー  
青柳 昌樹さん（麗澤大学2017年3月卒業）

楽天市場や楽天モバイル、楽天カードなど、国内外でインターネットサービスや金融サービスを提供しています。楽天会員数は国内1億人以上。

**Q** 現在、どのようなお仕事をされていますか？

**A** クライアントの課題設定を行い、その課題を解決するために過去の事例を調べたり、仮説を立てて分析したりします。時には異なる部署に協力を依頼したり、広告代理店と情報交換を行ったりしながら、クライアントに最適な課題解決方法を提示できるように情報を整理し最終的な提案を行っています。

**Q** 高校生に向けて、探究学習やその取り組みの重要性について一言メッセージをお願いします。

**A** 課題設定力が重要だと思います。設定した課題が間違っていたら、解決することはできません。問題のボトルネックとなっているものを知り、課題設定を行い、解決に向けて試行錯誤し実行に移してみてください。必ず誰かの役に立てる人材になれると思います。

## カナン国際教育学院

日本語教師  
渡部 梨沙さん（麗澤大学2018年3月卒業）

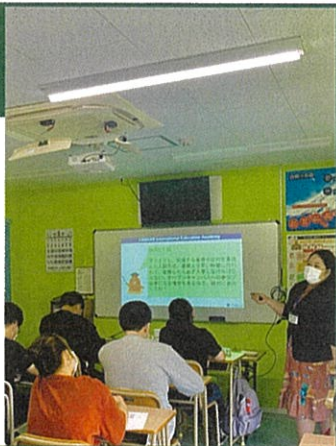
東京に校舎を構える留学生のための日本語学校。中国、ベトナム、ネパールなど東アジア出身の学生が多く、日本の大学や専門学校への進学を目指しています。

**Q** 探究学習で身につく力は、将来働く上でどのような場面で特に活かせると思いますか？

**A** 私が働いている業界では「臨機応変に対応」ということがよくあります。学習者が一人ひとり違うので、臨機応変な対応が求められます。そのためにも、自分から情報や技術を獲得し、分析、整理、そして実践へとつなげる必要があります。受身の姿勢ではなく、常に積極的に行動しなければ、学習者が満足できる授業や指導ができません。行動力を身につけることは、社会に出た時に大きな力となります。

**Q** 高校生に向けて、探究学習やその取り組みの重要性について一言メッセージをお願いします。

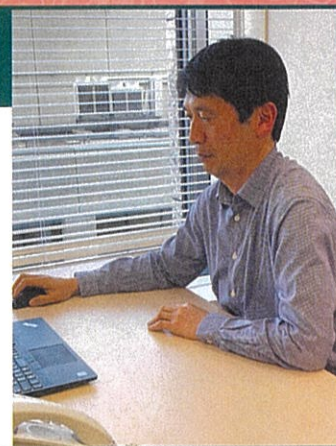
**A** 社会人として生活する上で、自ら考えて行動できることが必要ですが、それはひとりの人間として生きていく上でも重要になります。たった一度の人生をより充実したものにするには、受身の姿勢ではなく、より良くしたいという「探究心」が重要なのではないのでしょうか。



## 株式会社 大広

部長  
澤 慎介さん

「広告を出したいお店や企業」と「広告を掲載するメディア（TV、新聞、Webなど）」の間に立ち、サポートする広告代理店です。



**Q** 探究学習で身につく力は、将来働く上でどのような場面で特に活かせると思いますか？

**A** 現在広告代理店に勤務しています。私たちはモノではなく、アイデアをクライアントに提案します。課題を考え、マーケティング情報を収集し、社内外のスタッフと連携してプレゼンテーションに臨みます。探究学習で身につく力が、0から1を生み出す仕事のとても役立つと思います。

**Q** 高校生に向けて、探究学習やその取り組みの重要性について一言メッセージをお願いします。

**A** 受験で求められるような、決められた答えを導く力も大切ですが、社会では自ら課題を考え、解決していく力が求められます。高校生から探究学習に取り組んでおくことは、必ず社会で生きてくるといえます。

## 株式会社ISSUN

代表取締役  
宮松 利博さん

Web広告やHPの制作・運用など、Webの力で企業や学校などのPRが成功するよう支援している会社です。動画やSNS広告も手掛けています。



**Q** 探究学習で、どんなことを体験してほしいですか？

**A** 自らの考えを発信する体験をたくさんしてほしいと思います。私は以前勤務していたメーカーで新商品を開発していました。まだ新人でしたが新商品はSNSでの炎上要素もあるように感じていました。そこで、上司にSNSアカウントを作成して、商品に対する良い反応だけでなく、悪い反応も常にモニタリングしたほうが良いのではと提案。結果、炎上しましたが、早期に対処ができました。こんなことを言ったら何か言われるかも…なんて考える必要はありません。私は若い皆さんには、自らの考えをどんどん発信し、行動してほしいですね。

**Q** 高校生に向けて、探究学習やその取り組みの重要性について一言メッセージをお願いします。

**A** 卒業後の世界は、苦楽や悲喜、未経験の連続です。「教わっていないから」は言い訳になりません。暗記型ではない探究型トレーニングをひとつでも多くこなしておくことは、トラブルを避け自分の身を助け、喜びや成功が多くなります。

## スター電器製造株式会社

代表取締役社長  
鈴木 穰さん

建設現場ではもちろん、最近はDIYの流行から家庭でも利用する人が増えてきている「小型溶接機」のバイオニア企業です。2020年に創業60周年を迎えました。



**Q** 会社として、どのような点に力を入れていますか？

**A** 当社では、皆さんにはあまり馴染みがないかもしれませんが、「溶接機」を扱っています。使い易さはもちろんですが、一般のお客さんにも身近に感じてほしいという想いから、営業戦略として、カッコよさを探究し、商品開発に取り組んできました。その結果、溶接機メーカーとしては非常に珍しいグッドデザイン賞を2回受賞し、多くの評価と支持を得ることができました。

**Q** 高校生に向けて、探究学習やその取り組みの重要性について一言メッセージをお願いします。

**A** ベンチャー企業の生存率が創業から10年後には6.3%だと言われる中で、当社が62年も存続してこれたのは、モノやコトのあらゆる角度から溶接の魅力と可能性を探究し、変化に備え素早く柔軟に対応してきたからだと思います。探究学習を通して、変化に対応できる力を身につけてください。

## 青柳 昌樹

楽天グループ株式会社 ECコンサルティング部  
ホームライフ事業課 第二推進チーム  
アシスタントマネージャー

外国語学部 外国語学科  
英語コミュニケーション専攻 2017年3月卒業

福岡県出身。麗澤大学では「模擬国連団体」に所属し、3・4年次には団体の代表を務めた。卒業後は電子機器関連商社の営業職。英語講師(RIZAP ENGLISH)を経て2019年9月より現職。休日は、ゴルフなどのスポーツを楽しんだり、音楽を聴きながらのんびり過ごしたりすることが好き。



模擬国連団体：世界中の大学生、高校生が一國の大使として、疑似的に国際連合（以下、国連）の会議を行う活動。それぞれ担当する国の立場から、政策立案やスピーチ、他国との交渉を行い、国際問題や国連の機能、国際政治の仕組みを理解することを目的としています。麗澤大学は2011年からワシントンD.C.で開催される全米模擬国連大会に10年連続参加しています。



## 挑戦への恐怖心を乗り越えたところに 成長のチャンスがある。教えてくれたのは 「麗澤大学模擬国連団体」です

前編

楽天グループ株式会社に在籍し、約5万店が出店する国内最大級のECサイト「楽天市場」のECコンサルタントとして活躍する青柳昌樹さん。在学中は「麗澤大学模擬国連団体」に所属し、ワシントンD.C.で開催される「全米模擬国連大会」に2年連続出場するなど、その活動に打ち込む日々を過ごしました。そんな青柳さんに、学生時代のこと、現在の仕事についてお話を伺います。

### もっと伝えたい、理解したい！

#### 新しい希望をもたらしてくれた留学生との交流

私は、子どもの頃から野球が好きで、高校は野球の強豪校に進学しました。プロ野球選手になる夢を持ち、甲子園出場を目指して朝から晩まで野球漬けの生活を送っていましたが、高校生活最後の夏にベンチ外に。この時が、プロ野球選手になる夢をきっぱりと諦めた瞬間でした。

そんな私の人生に新しい希望をもたらしてくれたのが、カ

ナダから来ていた留学生でした。私が通っていた高校はアジアや英語圏から多くの留学生を受け入れていたのですが、たまたま食堂で留学生を見かけた時「あ、留学生がいる！」と興味本位で話しかけてみたのです。それがとても楽しくて。当時の私は英語が全く話せませんでした。異なるバックグラウンドを持った人と喋る難しさや楽しさに、すごく興味が湧きました。言葉が伝わった時は「よし、伝わった！」と嬉しくなったのを覚えています。その出来事をきっかけに、留学生と積極的に交流するようになり、もっと思いを伝えたい、互いに理解し合いたいと、自主的に英語を学ぶようになり

ました。

学び始めたものの、それまで野球三昧の日々で、まじめに勉強に取り組んでこなかったため、最初はきつかったですね。それでも高校3年生の夏に勉強を本格的に始め、朝から晩まで猛勉強して、12月に実用英語技能検定3級、3月には2級を取得しました。大学でも英語を学びたいと思い、国際性に定評のある麗澤大学に進学。麗澤大学の外国語学部には、英語を学べる専攻として、当時は英米文化専攻（現在の英語・リベラルアーツ専攻）もありましたが、人と話すことが好きな私は、迷わず英語コミュニケーション専攻を選びました。

### 英語でスピーチする

#### カッコいい先輩に憧れて模擬国連団体の一員に

私の大学生生活は「模擬国連」の活動がすべてと言っても過言ではありません。2年次の春から卒業するまでの3年間この活動にのめり込み、おかげで10年かけて学ぶようなスキルを凝縮された3年間で修得できたと思います。

私がこの活動と出会ったのは、1年次の秋。入学してからというもの、やりたいことも打ち込めるものも見つけられずなんとなく毎日過ごしていたところ、ある日「麗澤大学模擬国連団体」の先輩方が活動を紹介するために教室にやって来たのです。流暢な英語で皆の前で堂々とスピーチする先輩の姿が眩しくて、「カッコいい！ 私も先輩のようになりたい！」と心を揺さぶられました。

当时は、模擬国連団体に参加するための選考がありました。年に1度4月に募集があり、選考を通過した者だけが団体の一員になれるのです。そこを目指して、真剣に勉強に取り組みました。その甲斐あって2年次の春、晴れて模擬国連団体の一員になることができたのです。

### 全米模擬国連大会に出場。

#### 私の本気スイッチが入ったわけ

ところが、模擬国連団体の一員になったことが不安と恐怖の始まりとなりました。この活動はすべて英語で行われるため、英語を話せない私にとって、活動の時間は不安で頭がいっぱいでした。当時のメンバーの多くが帰国子女で、後輩の1年次生のほうが英語を話せたこともあり、肩身の狭い思いもしました。しかし、だからこそ皆についていくために必死に勉強できたのかもしれない。

大きな転機となったのが、2年次の冬に出場した「全米模擬国連大会」。海外の学生と真剣勝負で議論する場ですが、英語のネイティブスピーカーの学生に英語で量みかけられて、何を言っているのかさっぱりわからない。頭が真っ白になっている中、発言を試みるも「何を言っているんだ？」という顔をされる。もう居たたまれなくて、会議中、その場から逃げ出すように何度もトイレに行きました。当然、成果なんて出せません。本当に悔しくて泣きました。いま思い出しても無念ですね。

そこから私の本気スイッチが入りました。「あの場にもう一度戻って、自分に克ちたい」。そのことだけに集中して1年間

を過ごしました。英語力向上のために、日本にいても留学しているような環境で過ごそうと、日英バイリンガルの友達と行動をともにして英語で会話したり、大学に通う道すがら、発音練習をしたり。ただ、英語で対等に会話ができるようになるには、語学の勉強だけでは不十分。そもそも、自分の意見を持たないことには相手にしてもらえません。まずは日本語でも良いから、ニュースなどを見て感じたこと、考えたことについて友達と意見を交換したり、授業でも積極的に発言したりして、どんなことに対しても自分なりに考えて意見を述べる練習も積み重ねました。

そして3年次の冬、あの舞台に戻った私は1年前の自分とは違いました。前回はスタートラインにすら立てていませんでしたが、英語ネイティブの学生と対等に議論できるところまで到達し「頑張ったじゃん、自分！」と成長を感じることができたのです。

### 成長させてくれた大好きな団体を、

#### 次の代へつなげたい

3年次で活動を引退するつもりでしたが、4年次になっても引退せず、しかも代表として続けたのは、私の大好きなこの団体を、もっと大きく成長させて次の代へつなげたい、私が味わったような素晴らしい体験を、皆にも体験してほしいと思ったからです。

4年次は、新しく入ってくれたメンバー全員と模擬国連をやりにやること、一人ひとりが「入って良かった」と思える団体にすること、を目標にチームビルディングに力を注ぎました。コミュニケーションを図るために20冊以上のノートを準備して、メンバー全員と交換日記をしたり、夏合宿をして親睦を深めたりしました。メンバー全員との交換日記はさすがに量が多いのできつかったです（笑）。けれどもその甲斐あって誰一人途中で辞めることもなく、さらに成長した団体として次の代につなげることができました。

模擬国連は私に、成長のチャンスをたくさん与えてくれました。この場所で自分の力のなさを「これでもか」と突きつけられ、悔しい、恥ずかしい、苦しい思いをたくさん経験したからこそ、「やってみよう！」と頑張れ、私は大きく成長することができたと思います。いま、麗澤大学模擬国連団体はさらなる進化を遂げ、パッションのある学生が多く活動しています。大学生活で新しいことにチャレンジしたい、充実した時間を過ごしたい、そんな人に、ぜひおすすめしたい活動団体です。



後編はこちら

